インパールの話（63・6・18）

畠山　鐵次（昭和12文甲）

ご紹介に預りました畠山でございます。

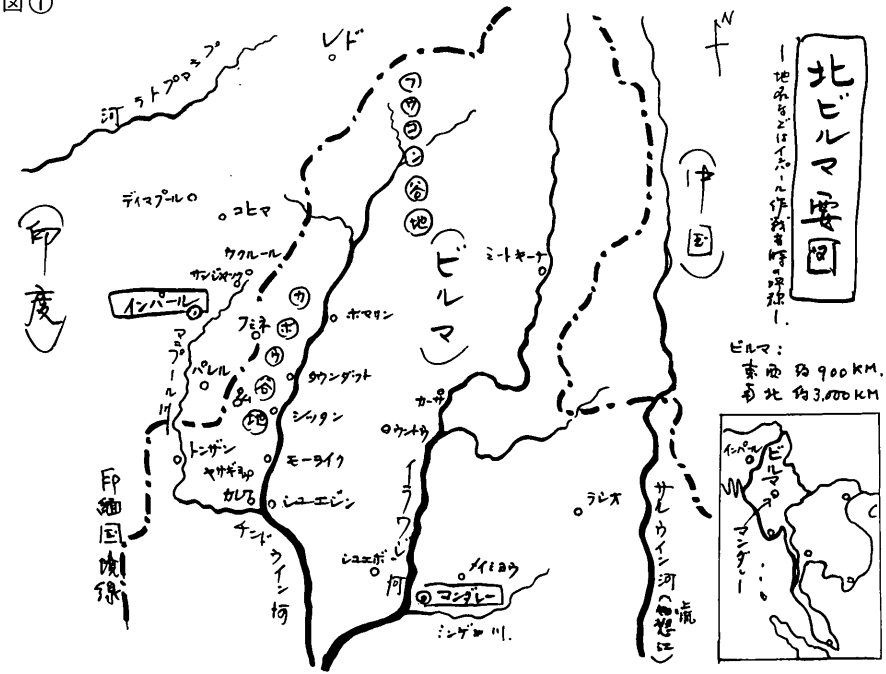
本日はご多用中のところ、たくさんの方々がおいで下さいまして有難うございます。又こういうお話をさせて頂く機会を与えて下さいました関係各位の皆さんに、併せてお礼を申し上げます。

私、こういう高い所からお話することは慣れておりません。まあ苦手ですので、実際のところは心配なのが本音でございます。

では、お手もとの項目資料をご覧下さい。だいたい一時間半でこれくらいをお話したいものと考えましたが、うまくゆきますかどうかです。

最初にインパール作戦の概要、次に主計としての回想、三つめに朝日新聞の切抜記事の順にいたします。

図①


北ビルマ要図
ビルマ：
東西 約900KM.
南北 約3,000KM
インパール
コヒマ
ディマプール
ウクルール
ホマリン
タウンダット
シッタン
モーライク
シューエジン
カレワ
チンドウイン河
イラワジ河
カーサ
ウントウ
シュエボ
メイミョウ
コンダレー
シンゲル川
ラシオ
サルウイン河
印度
印緬国境線
ビルマ
中国
インパール
ビルマ
コンダレー

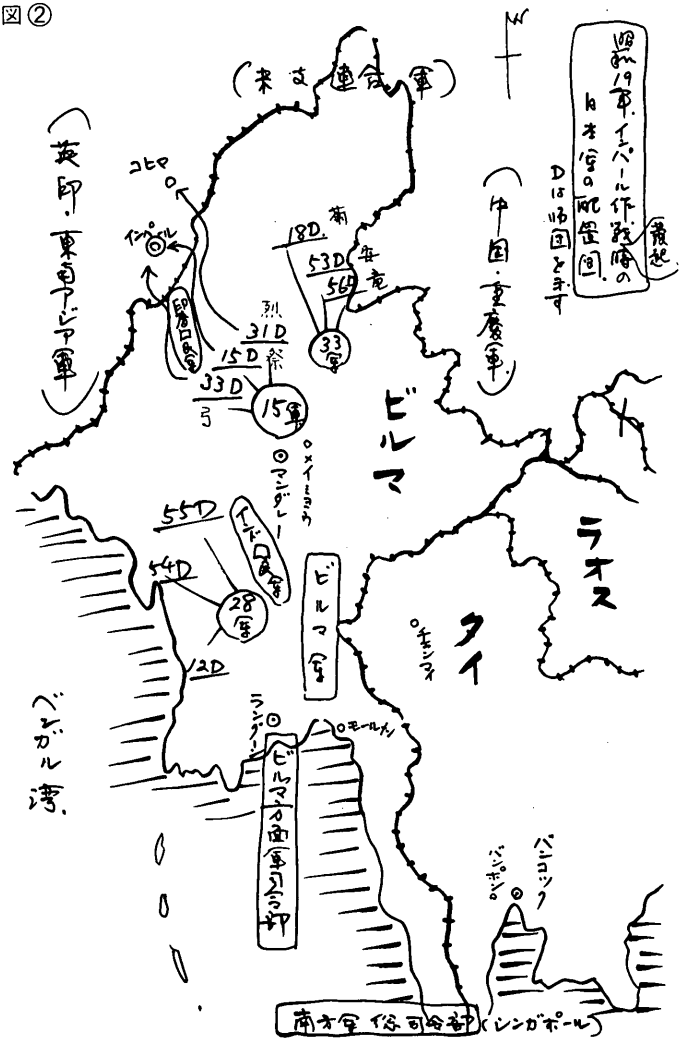
一　インパール作戦の概要

それではこの『北ビルマ要図』（図(1)）と『作戦発起時の日本軍配置図』（図(2)）の両方をご覧下さい。ビルマと申しますのは日本から直線距離にして五～六千粁離れていて、このゆがんだダイヤモンド形の国がビルマです。中国の西南に位し、ラオスとタイの西側、インドの東側、だいたい日本国土の一・八倍といわれております。そのド真中マンダレーの西北にインパールという処があります。この印度領内インパールは敵の一大據点となりまして、連合軍と日本陸軍との決戦場になったところです。

インパール作戦を組織の上から申しますと、一番上に大本営、次に南方総軍司令部（シンガポール）、それからビルマ方面軍司令部（ラングーン）、その下に三個軍団がありました。図(2)で見て頂けますように、各軍団には三個師団づつありますので、3×3、計九個師団あるわけです。各師団はそれぞれ約二万人と計算しますと十八万人。それに、その他いろ〳〵合せてだいたい二十万から二十二万人の日本軍がビルマ方面派遣軍として居りまして、その中の第十五軍（弓、祭、烈の三個師団）がインパール作戦に参加したことになります。

第十五軍はマンダレーの右、メイミョーに司令部を置き、作戦には三個師団のほかにインド国民軍が参加しまして、チンドウイン河を西に渡って国境を越え、インパールを攻めました。作戦

図②


昭和19年 インパール作戦時の日本軍の配置図
Dは師団とします
(米支連合軍)
(英印・東南アジア軍)
(中国・重慶軍)
コヒマ
インパール
印度国民軍
18D
菊
53D
毎
56D
竜
33軍
31D
烈
15D
祭
33D
弓
15軍
ビルマ
メイミョウ
マンダレー
55D
54D
28軍
インド国民軍
ビルマ軍
ラオス
タイ
チェンマイ
2D
ベンガル湾
ラングーン
モールメン
ビルマ方面軍司令部
バンコック
バンポー
南方軍総司令部(シンガポール)

の正味期間は昭和十九年三月から七月に至る僅かに四ヶ月でした。

どれくらいの人数が行って、どれくらい帰って来られたかをお話しますと、各師団二万人の内、弓がチンドウイン河を渡った将兵は約一万七千人、祭が約一万六千人、烈が約一万六千六百人。それ〴〵の消耗率が順次に八四％、七八％、六七％という資料があります。軍が直接指揮した軍直部隊三万六千人がこれらに加算されて、合計すると八万六千人が攻め込んだという数字があります。私なりに調べましたところでは、このあたりが当を得ているものと思いますが、全くウソの様にもとれる数字でございます。

此の作戦はいろ〳〵と経緯があるのです。年表から拾ってお話を進めることと致します。昭和六年頃から陸軍軍閥の抬頭が物凄くなりまして、七年から血盟団事件、五・一五事件、二・二六事件と相継いで事件が起りました。昭和十二年七月七日、蘆溝橋の日中両軍の衝突に因って日中戦争が始まりました。これは先だって奥野長官発言が問題化したものですが、この蘆溝橋の一発は、その日本側の現地責任者がほかならぬインパール作戦の軍司令官牟田口廉也その人です。六年ばかり前の当時、連隊長であったわけです。そして師団長が川辺正三でした。このコンビがインパールでも同じく、牟田口第十五軍司令官、川辺ビルマ方面軍司令官であって、大本営を頂点にして南方総軍以下それ〴〵のヘッドは強固な人脈があったと考えられます。

ここで、抜萃ですが、朝日の切抜『戦争を忘れまい』（末尾に掲載）㊦を見て下さい。十二年

七月七日、牟田口連隊長は何かを待っているかのようにイラ〳〵と落付かなかったとあるほかに、インパール作戦開始時に牟田口軍司令官は『蘆溝橋で第一発を撃って戦争を起こしたのはワシだから、ワシがこの戦争のカタをつけねばならんと思っておる』と、こういう思いあがった、重大な発言をしているのです。蘆溝橋の真相は未だにわからないことになっていますが、軍司令官は主脳部を集めていつもこういうことを云っておったのが事実らしいです。

昭和十四年には第二次世界大戦が始まり、十六年十月十八日、東條内閣が成立しました。戦時大本営で最も発言力のあるのが参謀総長と、海軍軍令部長。東條は首相のほかに陸相、内相兼任、十九年になると軍需相と参謀総長を兼務しました。同十六年十二月八日、太平洋戦争開始、真珠湾急襲、泰国進駐、マレー半島上陸、フィリピン攻撃と続きました。パールハーバーの日、私は東京牛込の陸軍経理学校に居りました。十七年二月十五日、シンガポール攻略。同三月八日にはラングーンを占領しています。同十七年七月五日、この三高会館で、二松さんの話された、泰緬鐵道建設が始まり、一年後の十八年十月二十五日に完成しました。この建設には俘虜虐待とか、枕木一本に俘虜一人を死なせたとか、非情な話が伝えられましたが、これらに就いては二松さんの本『三塔峠を越えて』に詳しく載っております。

このインパール作戦は別称ウ号作戦とも申しまして、実施決定までには複雑な経緯があったようです。昭和十七年と十八年は、英印軍をビルマから追払うために四個師団くらいで二、三回戦

争をしましたが、ウ号作戦には増強されて九個師団になりました。第十五師団（祭）は作戦参加を命ぜられて、南京より急遽馳せ参じました次第で、私は祭師団経理部の一員でした。

昭和十八年二月には日本軍がガナルカダル島から撤退しております。ここは略して、ガ島、あて字をして餓島と云われますが、当時兵隊間のはやり文句『ジャワは天国、ビルマは地獄、生きて帰れぬニューギニア』がありました。ニューギニアの代表格ガ島は三万何千人がおって、一万人程度が生きて帰った模様です。その生き残りがなんと、インパール作戦に参加しておりました。コヒマからウクルールに辿りついた烈師団の一員が『ガダルよりも酷い、俺らは全然ついとらん』と繰返し〳〵こぼしておりました。

烈にはあの有名な抗命問題があります。この抗命問題は佐藤師団長が、軍が補給の約束を無視したために、苦戦の上餓死者続出、食えるところまで転進するんだ、戦線離脱ではないと、軍命令に対抗したのです。軍法会議にもち込まれれば軍司令官の負けるのは明白と思います。佐藤師団長はお気の毒に気チガイにされてしまいました。

少し横路に入りまして恐縮です。昭和十八年八月一日ビルマ独立宣言、ビルマ国防軍はビルマ国軍となりました。年が明けて十九年一月七日、大本営はやっとインパール作戦決行の許可を出し、三月八日作戦発起となります。祭の山内師団長は兵団より先行し、一月一日、北部タイ経由マンダレー入りをしました。私は師団長を案内した輜重隊の自動車に乗っておりました。

三月八日、祭と烈はチンドウイン渡河を開始。夜を日についで進攻を重ねて、祭はインパールまで四、五粁のところまで進出し、飛行場へ一時は突入。烈はコヒマを占領し、敵の補給路コヒマ～インパール道を遮断しました。しかしながら英国側では、英軍は予定の退却、日本軍をインパールに引きつけてから、徹底的に空と陸上から集中砲火を浴びせてやっつけたんだといいます。敵はトラックと飛行機で戦略物資をふんだんに補給し、戦車をも駆使できる態勢でありますのに対して、日本軍の方は、航空隊の協力無く、軽装備で行きました。必勝の信念には天佑神助もあって三週間程度で落せるという無謀な見込みであった様です。遅くとも天長節四月二十九日までに落せとの命令でした。

この要図では不十分ですから黒板を使わせて頂きます。ヒマラヤ山系がこう東西にあって南方向にパトカイ山系、アラカン山系が伸びて国境線をなしております。この南北に亘る縦皺の多い天然の国境山岳地帯を越えて行きました。軽装ですから兵器は小銃、機関銃、擲弾筒くらい。火砲はほとんど届きません。自動車隊が野砲の輸送を試みましたが、全部駄目。榴弾砲が届いたと聞きましたけれども役立たなかったようです。敵は日本軍が南から攻めてくるという予測によって、幾重にも抵抗陣地を作っておりました。烈師団はその正面を北に向ったのですから難澁を極めたのは当然でした。多少の戦車があったのですが、南に開かれたインパール平野は湿地帯であるに加えて雨季到来の結果すべて立往生でした。

祭は先程申し上げた通りインパールに接近することはしたのですが、山岳地帯を辛うじて抜け出して稜線まで出ますと、敵からは砲撃の照準がきまるわけです。出たところ、出たところ片っ端から砲撃を喰らい、全滅続きでした。夜襲のお返しは広範囲の投下爆弾でした。それになほ戦車が現れました。戦車砲の威力に対しては手榴弾、対戦車爆弾（通称アンパン）はものの数ではありませんでした。全く比較にならぬ戦闘で、必勝の信念は宙に舞ひまして四ヶ月間の死闘が続いたのです。そこへ五月の声を聞きますと恐るべき雨季がやってきました。

印度アッサム地方の雨季は凄いものです。最高記録、一日千ミリがあります。千ミリといえば一メートル、世界では指折りの降雨量らしく、平均年間雨量が十六米。ご参考までに東京はその十分の一、一米六百の由です。雨季と申しましても、晴れる時間帯がもちろんあるのですが、道という道はすべて川になり、川は川で平時の二倍、三倍に増水、元々の湿地帯は広びろとした沼地に変貌します。この雨季が各兵団の消耗率を高めたことは申すまでもありません。

インパール作戦は昭和十九年三月八日発起、七月三日には大本営が中止を決定しました。第十五軍は七月十日、各兵団の攻撃任務を解き、戦線整理を命じました。しかし烈師団はそれに先だち、コヒマから退却、ウクルールへ向いましたので、祭は孤立状態となりました。それで亦退却を余儀なくされてしまいました。

七月十八日、東條内閣は総辞職。各兵団、弓、祭、烈はそれ〴〵撤退行動に移るわけでありま

すが、インパール地区から国境フミネ、フミネから国境の東に沿って南へタム、タムから東へチンドウイン河岸のシッタンへと道が通じておりまして、このあたりのカボー谷地が世に謂う白骨街道、地獄街道であります。

昭和二十年になりますと、インパール作戦の続きみたいな恰好でイラワジ河畔会戦が一月十六日から始まりました。三月には英印軍がマンダレーを奪回、五月二日、ラングーン陥落。五月八日、ドイツ軍降伏。八月に入り原子爆弾が広島と長崎に落とされ、八月十五日終戦の詔勅放送、敗戦決定。こんなところが日を追った関係事項でございます。

次に少し角度を変えましてお話致します。大東亜戦争は国威発揚、大東亜共栄圏確立をモットーに開始されましたが、石油資源確保のためにも南へ南へと伸びたと云えます。アメリカを叩くためにパール・ハーバーをやり、英国を叩くにはシンガポールを攻略、上海では艦船をやっつけた。仏印、ビルマ方面をしっかり固めないと石油資源確保が難かしいし、中国蔣政権への連合軍物資輸送路の遮断ができないと、色々理由をつけてビルマに軍政も敷き、遂に遙々インパールまで伸びてしまいました。その間、バーモだとかチャンドラボースがそれぞれ自国の独立を政治問題として日本政府にもち掛けました。東條首相は、戦況誠に不利な中、乾坤一擲、情勢挽回をインパール作戦に托して決行に踏み切った様子です。

最初、インパール作戦案は牟田口司令官自身でも反対していたのが、一転積極策に変じて、上

層部へ決行許可を執拗に迫ったらしいです。そして決行ときまると、反対意見の軍参謀長を筆頭に、配下師団長らを次々とクビにしました。徹頭徹尾精神主義、必勝信念と天佑神助を結びつけた、日本陸軍が育てた狂信者、夜郎自大もよいところであった様に思います。陸軍精神主義は神がかっていました。

作戦末期、戦況意のまゝにならず、司令部内に立派な神棚を造り、白砂が敷かれてあって、毎朝々々大声で祝詞（ノリト）様なものをとなえ、お祈りをしていたらしいです。このような現地軍司令官のもとでは、優秀な将兵が随分おった筈ですけれども、どうにもならず、何万と死んでいったということです。それも戦闘で死んだのはそのうち約三〇％といわれます。あとは餓死、病死、自決でした。行動の自由を奪われた者の手榴弾自決は悲痛そのものでした。銃を持たず、手榴弾もない者に、拳銃を借せとしがみつかれて困惑したこともありました。

どうも、あちこち話がとびまして恐縮です。これで概要を終らせて頂きます。

二　第十五師団（祭）主計の回想

次は主計としての具体的な体験談をさせて頂きます。陰惨な戦争話の中にも、多少とも息抜きのできたエピソードを混じえてお話します。

① 輸送機関収集隊

作戦決行決定から発起まで、私は輸送機関収集隊勤務に就きました。軍と師団からの指令があって、牛、馬、象をおおいに使え、集めよとなったのです。と申しますのは、山岳地帯踏破ですから車両は役に立たぬかも知れぬ。梱包を背に積める輸送機関を徴発せよ、牛馬が頼りにならぬ時は象でやれということなのです。先ずマンダレー周辺から始めました。

州知事に面会を申し込み交渉する時、その事務能率の良いことに感心したことがあります。私が、三高時代の外人教師フランク・ホーレーやシヤイベリーの顔を思い浮べながら、ブロークン英語よろしく副知事に要望を話しだしますと、タイプライターを持ち出し、私の話を聞きながらカチャ〳〵とやるのです。失礼なヤツだなあと思いましたが、私の話を確認しながら聞いています。そして最後に、マスターの要望を文書にした、間違いがなければここにサインをしてくれ、一緒に知事のところへ行く、と云うのです。見れば立派な英文です。知事は文書に眼を通しOKと自分のサインをしました。それで契約終了です。そのあとは、例えば、牛百頭を一週間以内に部隊へ届ける約束を遅滞なく履行してくれました。軍と師団が根廻しをしてくれていたのでしょうが、英國支配の植民地の役人教育のすばらしさに感心したことでした。

それから象ですが、象集めはキャンプ単位でした。ワン・グループ、ワン・キャンプは象の一家族です。七頭か八頭が一般であったと思いますが、多い群になりますと十数頭いました。野生

の象を捕えてうまく飼い馴らしている木材会社から象使いもろ共借り受けることになりました。借用証にはいくつかの条項を並べて、私が責任者として署名したのです。マンダレーを中心に二百頭近く集めました。象は飼料を与えなくともよい利点があります。仕事が終わると、逃げてしまわぬように脚を鎖でゆるく縛って放してやります。象は適当にジャングル内で草や竹笹、バナナの樹などを喰ふわけです。借り受けるのに気が楽でした。象使いが象一頭に一人づつ付きます。象使いの長をキャプテンと呼んでやると喜んでおりました。炊事担当も決められてあって、象使いの食糧さえ携行すれば、どこででも活動出来る仕組になっておりました。

それから馬。馬はビルマ人が特に大事にしていました。その徴発、馬買いにラングーンへ行ったお話をします。ラングーンのビルマ政府に馬政局（Veterianary の横に墨書）がありました大臣級の局長が居ました。私は村上獣医と二人で下士官、兵二十名程を連れて行きました。コカイン兵舎跡に位置して、馬政局役人と何度か協議をして、ラングーンを四地区に分け、地区毎に馬を集めて良馬を徴発することとしました。

一、〇〇日に馬の持主は馬を連れて〇〇指定場所に来ること

一、良い馬は日本軍が買う

一、当日馬を連れて来ないときは馬を没収する

右の布告を期日に先立って出しましたところ、ラングーンは広いもので一地区で百頭を超えたと

ころもありました。大変な数です。馬政局と共に実施するのですから強制力がありました。初日は馬政局のおえら方も万一のトラブルを心配して大勢来てくれました。そこで、日本軍として誰かがその趣旨を話さねばならぬことになりまして、私は引っ込みがつかず、已むを得ず、一世一代の英語演説を四回、やりました。

『日本軍ハ戦争スルタメニビルマヘ来タ。君達ト一緒ニ戦イタイ。シカシ今、馬ガ足リナイカラ協力ヲ頼ム。モチロン、馬ニ対シテ適正ナ代價ヲ支払ウ。君達ノ身代リノ馬ト共ニ戦ウコトガデキルナラバ、必ズ勝利ヲ得ルデアロー』と精一杯、臆面もなくやってのけました。中支戦線で白壁にデカ〳〵と書かれていた敵のスローガン、『有力出力、有銭出銭』を想い出しておりました。生涯の想い出です。

手順などを具体的に申し上げますと、順番に馬主が馬を曳いてきますと、馬政局役人と村上獣医らが馬体を調べて採用する馬を決めます。採用しない馬はそのお尻にバツ印の焼印を押して放免。採用の馬には祭の別称浪のイニシアルNを使いました。N印馬の代價支払に就いては特にお話しておきたいことがあるのです。当時為替レートはパーでした。百円が百ルピーです。その頃陸軍少尉の俸給が月十七円なにがしであったと記憶しておりますが、馬の値打は馬政局の役人がこれくらいで可いと云うので決定したまでです。安い馬が六十ルピー、高い馬が百六十ルピーでした。家族同様に可愛いがっている馬を巻き上げる場合もある筈です。百ルピー紙幣一枚と十ル

ピー紙幣六枚を渡してやるよりも、多少とも部厚く、枚数の多い札束一ルピー札百六十枚で渡してやる方が気が休まるのでは、と考えました。横浜正金ラングーン支店で準備して貰った一ルピー札で全部を支払ってやりました。合計百二十頭を四地区で購入致しました。そして方面軍が手配して呉れました特別仕立の馬匹輸送列車（貨車十五両）で、六百粁をマンダレーまで帰るのです。馬は一両に八頭、要員二十名を各貨車に割当て、私も伝令と共に八頭の馬ずらの下に秣（マグサ）と一緒に乗り込みました。列車は事無く北上して夜が明け、あと一駅でマンダレーというところで停車しました。私が伝令と車外に出て一息入れている時、恐らく敵機の情報が入ったのでしょう、列車は急に発車してしまいました。慌てましたが処置なしです。主計が命の次に大事にしている金櫃（キンキ）（携帯用金庫）が主と離れて行ってしまったのです。幸いキャウクセの郡長邸が近かったのでトラックを仕立てて貰い、マンダレーまで飛んで帰りました。収集隊が一時大騒ぎになったそうですが、すべてが無事でホッとしたことでした。

こんなことで牛、馬、象を集めて作戦参加部隊に交付したのです。けれども残念ながら、牛馬は酷使と飼糧難のために国境を越える頃までに殆ど死に、肉は将兵の腹の足しになりました。屍肉を奪いあう亡者の群の有様は正に餓鬼道でした。象は戦況がおかしくなると、次々と逃げうせてしまいました。

ラングーンからマンダレーに帰りますと、祭師団各部隊は順次西に向って出発していました。

私が師団司令部、獣医部、経理部へ馬匹徴発終了の申告にまいりますと、『お前らはよくやってきた。部隊といっしょに行かんでもよろしい。命令があった時は追及して来い。連隊の方へはその云っておいたからそうしろ』と、収集隊は解散したのですが残務整理の名目で、そのあと永い間、西瓜などを喰って待機しておりました。そうは云いましてもマンダレーは連日連夜爆撃の危険に晒されていました。

② 部隊追及と負傷

追及命令は届きませんが、軍司令部が前進する時には、それよりおくれると具合が悪いと判断しまして、軍参謀部へ頼みこみました。よかろう、近く軍司令部は西へ出る、車があるなら随いて来い、と云われました。私は残留員と二台のトラックに乗り、軍司令部の最後尾に随いて出発しました。十九年六月初旬であったと想います。しかしマンダレー西北を少し行ったところで敵の火焔放射機と機関銃に出会いました。不意を衝かれて全車Uターン、路を変えて前進しました。例の有名なウインゲート準将の統いるグライダー降下部隊が居たわけです。前線はインパールの近くまで進出しているに拘らず、敵はこんなところでも出没していたのが実態です。私は暫くは軍司令官のあとに随いていましたが、適当なところで意識的にはぐれました。カレワへ通じる街道筋は敵の偵察機スピットファイアーがいつ現れるか判らず、こちらに制空権が全然無いので、

敵は跳梁のままでした。見つかれば必ず機銃掃射か投下爆弾でやられます。私らが持っていた車も二台共やられてしまい、最後は歩いて追及するほか途はありませんでした。カレワ、タム、フミネ、サンジャツクを通り、師団輜重に追及したのがウクルールでした。連隊本部と第二中隊（私が配属されている清水隊）が密林中にバラ〳〵に隠れていました。

追及して三日後、十九年七月七日の夕刻、炊煙が見付かったらしく、敵編隊機の急降下機銃掃射と投下爆弾で清水隊は十数人の死傷者が出ました。私は左背軟部盲貫投下爆弾破片創という長い名称の戦傷を受け、たった一本、中村軍医が持っていた血清注射に因って破傷風菌よりのがれました。私のほかには、衛生下士官は太もも貫通銃創の穴にヨードチンキを流し込んで助かりました。助かったのは二人だけでした。

③ 単独退却行

負傷したあと、連隊長命令により単独後退。理由は消毒液すら欠乏、戦況益々味方に不利、部隊の足手まといになる公算あり、単独行動は部隊を離れて行動することを意味します。心臓脚気に苦しむ小隊長と伝令と、三人で後退いたしました。国境フミネまでは象部隊長の厚意に依って濁流を渡り、コレラ地帯を突破しました。白骨街道はすべて徒歩。言語に絶する地獄街道。今もなほ悪夢払う可からずです。二ヶ月掛ってチンドウィン河沿いのモーライク野戦病院に辿り着き

ました。

『貴官はナンと幸運な奴か。少し角度が違っていたら慥かに心臓を裏からやられとる。破片の跳力が少しでも強ければ脊骨に突き刺さっとる。全く幸運だゾ！』そして周囲に『よーく視ておけ！これを動脈出血と謂うんダ！』と摘出手術執刀の軍医が云いました。破片は巾五粍、長さ十二、三粍ほどでした。

ここで本を二冊ご紹介しておきます。一つは京都新聞社出版の『悲運の京都兵団証言録、防人（サキモリ）の詩（うた）、インパール篇』、もう一つは岩波新書二六九『インパール作戦従軍記』丸山静夫著です。インパール作戦に関しては沢山の本や記録がありますが、私はこの二冊を推奨致します。白骨街道についても色々記事がございます。京都兵団は祭と安を指します。

なお少し脱線をお恕し下さい。『インパール帰りだそうだが、ビルマでは食うものが無かったから人肉を食ったか食わなかったか、どちらだ？』という質問をよく受けるのです。私自身は食ったことはありませんが、一般に食わなかったとは云えない、が私なりの返事であります。これは清水隊がシヤン高原を南下転進中のことです。ロイコのK師団司令部に経理部長を訪ねまして、『主食欠乏で弱っている。何か良い方法を教えて貰えないか？』と問いますと、『貴官は二本足で歩いている食糧を考えたことがあるか？』と逆質問が返ってきました。ご推察頂ける通り人肉のことです。私は多くを語らず『判りました。帰ります！』と辞しました。もうひとつは、カボ

ウ谷地、白骨街道では死人の太腿の肉が抉り取られたらしく、しかもそれをぶらさげて取引している兵隊が居た記事がありました。私も食えるものは何でも食いましたが人肉はどうも…。

④ 土侯一族と一村・戦線より救出

イエウの近くに居る時、イエウの土侯（ソウバ）一族と一村を戦線より救出したことがありました。これは糧秣収集やその他もろもろの情報集めなどでビルマ人と接触している間に起きたことでございます。そのソウバは英国留学の経歴があり、まだ独身。洒落た館に住んでおりまして、執事は村長を兼ねていました。日本軍警備の隊長は『ソウバも村民もみな誰も村から移動することは絶対に許さぬ』と指示しているらしいのです。変だと感じて執事に訊ねると、英軍は近くに来ている、斥候らしいのが昨日も現れてアアだった、コウだった、と答えます。情報を集めますと、明日くらい英軍（イングリとビルマ人は称していました）はここを砲撃するかも知れんという情報まではいりました。私はソウバに教えました。危い！今の内に逃げることだ。ここは最前線。二、三日内に戦場になるかもしれない。戦場になれば小銃、機関銃だけじゃなく砲弾が飛んでくる。ソウバの館も一村もみな燃えてフッ飛ぶかも知れぬ、と忠告してやりました。ソウバと執事は、警備の隊長が動くなと云うのに、マスターがそんなことを云って貰うのは困る。どうしたら可いか？と真剣な顔です。『構わん、逃げろ』と更めて云うと『マスター一緒に来てくれる

か?』と哀願する様子に、成り行き上、乗りかゝった舟ですから、よーし、行ってやろう、警備隊のヤツが何か云った時には身代りにもなって話をつけてやろうと、腹をきめました。今夜出発したい、マスターは日暮に来てほしい、必ず来てくれ、と頼みます。私は清水隊に諒解を得て兵隊さん何人かを連れて約束の場所へ行きますと、荷物満載の牛車が何十両あったでしょうか、村民らはあちこちに屯ろしてさゝやいている様子です。

出発するとき、代表格のものを集めて注意事項などを指示しました。「行動は静かであることが何よりも大切」「廻り道になっても安全と考えられる道を選べ」「日本軍に接触しそうになった時はすぐに自分に知らせよ」くらいを云ったように思います。そして最後に指を口にあてて、クワイエト、クワイエトと重ねて注意を喚起しましたところ、執事が周囲に向って、ビー、クワイエト、ビー、クワイエトと徹底さすのです。ああ俺の英語はこんな程度だったかと反省したことでした。

ソウバは母親と妹達を裏山に退避させるため別行動をとりました。幸いなことに闇夜でしたが、警備隊は知ってか知らずか、何事もなくいくつもいくつも丘や谷を越えて長蛇の列が進みました。屈強の若者達に前方と左右を護られて進みました。そして山あいに逆茂木(サカモギ)のある処へ出ました。ここが隠れ家のある目的地でした。

恐らく隠れ家中でも一番よい家に案内されまして、私は本当にホッといたしました。疲れたろ

う、腹が減ったろうと大変なご馳走を出してくれます。凄い絨毯、色鮮かな上等の寝具はどうも準備してあったらしく、どうぞ休んでくれ、寝てくれというのです。下士官、兵五、六人と共に寝たのですが、よい寝具で寝ますとすぐに温かくなります。しらみが這いだします。お互いに顔を見合せて痒ゆかったなあ、と云ったのを憶えています。久し振りによい気持になって昼前まで寝たようでした。

起きると、ソウバや執事ほか大勢の村民が集っていました。村は早朝からすでに戦場になって砲火を浴び、あちこちに火の手が揚っていると注進がありました。ソウバは、マスターは大恩人だから、皆さんで何日居ってくれても可い、何でも入用なものがあるなら何でも差上げる、マスターが指令を呉れたら、強い若者を何人でも差し出す、と云ってくれました。周囲の人が皆私に向って合掌し感謝してくれます。どうも少し照れくさい様な面目を施したことでした。

ソウバの言葉に甘えて、部隊は食糧に困っているので何でもよいから食うものを欲しいと告げますと、二頭だての牛車に一ぱい、米、野菜、酒煙草などを積み込んで、牛、牛車共みな進呈すると云ってくれます。ソウバ以下なみいる人の合掌に送られて帰途に就いたことがありました。私としては非戦闘員の民間人を戦線より退避させた当然のことをしただけですが、嬉しいことは嬉しかったです。

私がもしビルマに残って居れば、そのイエウの土侯といろんなことが出来たかも知れません。

その後の日本軍は敗退続きでタイ國さして逃げのびました。残念ながら土侯とは連絡がとれないまゝとなってしまいました。

⑤ 象狩りと解剖

私らはインパール作戦中、食えるものは何でも喰ったのですから、野生の象がおるのなら象を捕えて腹一杯食いたいなあという発想が出てくるのです。誰でも同じでした。

象狩りには私らがマンダレーの北百粁ほどのシングー近くに、イラワジ河畔会戦前に居た頃の話です。

清水隊長と、『何かこう兵隊さんも腹が減っているのか元気が無いし、象がとれて腹一杯食えたらよいですなァ、何とか捕れんかなァ、私探してみますワ』『そんな無理をせんでもよいョ』の会話がキッカケで、私は象狩りをやってやろうと決心しました。野象が居るとの情報があるので、願ってもないチャンスと思ったからです。具体化には村長に相談すればよいと教えてくれる者があって、村長に掛け合いました。結論は早く出ました。村長は『どうしても野生の象を仆したいのならば私が案内する。明日夜明前に銃を持ってここへ来てくれ』となりました。私は狙撃のうまい兵隊さん二人と、伝令を連れて約束通り出掛けました。村長は息子と二人で案内にたってくれました。明るくなって先ず到着した所はジャングル内の泉でした。ボタ〳〵と象の足跡が

たくさんあります。鹿の足跡らしいのに混じって、猫の足跡よりも大きな新しいのがあります。質問しますと虎でした。私はすぐに拳銃の安全装置を外しました。兵隊さんも動揺しました。『ケサムシブー（心配無用）虎はこちらから仕掛けぬ限り襲って来ない』と村長は冷静です。半信半疑でしたが、気のせいか、竹藪の向うを横切ったのは虎の様に思いました。

象は必ず集団で行動します。従って密林中でも象の群が通ったところはそれらしい道ができますし、地面が湿っておればハッキリ足跡がつきます。木の葉の踏み具合、樹木の枝の折れ具合によって象みちの新旧の判断がつくようです。村長と息子は三叉路などで疑問が起ると、両方に別れて進んで調べて、昨夜の道はこちらだと断定します。ジャングル内を何時間歩いたでしょうか、いよ〳〵象が近いと判明しますのは排泄物でした。山盛りの軟らかくて太いのに湯気が立っておりました。そこから、村長が一層慎重になった様子でした。

村長は向直って私の眼を正面から視てこう云いました。『マスター、その銃を借してくれ。私が撃つ』と。私達は私の拳銃と兵隊さんの小銃で象を仆すつもりでしたから理由を訊ねますと、象は頭が良い、私がどこの男かぐらいは知っている。もしグループ中の殺して悪い象を殺すか傷つけると、私の村は一日とおかずに象の一群に襲われて潰されてしまう。殺してもよい象か、そうでない象かが判るのは私だけだから私が撃つ。銃を借してくれ、という説明です。一應スジは通りますから小銃一挺を貸しましたが、まだ知り合ったのが昨日の男に、もし銃を持逃げされて

は事が面倒になります。もし持逃げの気配があれば取返し、取返すことができぬ場合は射殺してもよろしい、と兵隊さんに指示しました。

ジャングル内でもやはり暑くて、もうなる様になれという気持になりました。小走りに進む村長のあとに随くことは断念しました。そのあと村長たちは風下へ風下へと廻って行ったようでした。象は敏感ですから、風上からでは必ず逃げられるそうです。

ダン！　ダン！　ダーン！　と三発。少し間をおいて、『マスター、マスター』と小銃を振りかざして村長が返ってきました。おりかえし皆で現場へ行きますと、耳から撃っております。耳から頭に入り、絶命したようです。群から少し離れていたらしく小柄の雌象でした。カメラがあったら、一生の記念になるのだが、とふと思いました。

翌日分配することにして時刻をきめ、あすは迷はずここに来られるようにと、木々に印をつけました。幸運なことに牛車道へ出るのにそうはかかりませんでした。

前後しましたが、いくら象を仆したといっても証據品無しでは駄目じゃないかと気がつき、象の鼻を切ることにしましたが、ゴボー剣（兵隊さんの帯剣）では切れませんでした。村長らも然るべき刃物を持ちあわせておりません。でわ、と私の軍刀を抜いたところ赤錆の鰯でしたが、切れました。鼻先七十糎ほど。力を入れて切った時の感触は、今この掌に残っています。鼻先を担がせて帰ってきたのですから、一時は話題の人となりました。

翌日は清水隊長も、今敵状はたいしたことはないからオレも連れて行けよと云いますし、村上獣医のほか丸山獣医も是非解剖させてくれと頼みますし、随分大勢が同行しました。牛車三台には鋸(ノコギリ)も鉈(ナタ)も手配されていました。

現場の象ははち切れんばかりに膨らんでいました。ジャングルの中とはいえ、熱い日中を経ていますので内蔵の内容物が醗酵していたのです。丸山獣医のメスが触れるやいなや腹は裂け、内蔵がむくれ上ります。突如ブァーンと大きな音と共に、覗き込んでいた者みんなの顔面に異物が飛び散りました。胃の内容物です。べとべとの代物を互いに苦笑いして、指でしごき取りました。乾草の腐った程度であまり臭いことがなく、助かりました。腸は、太い消防ポンプのホースがブルン、ブルン〳〵と飛び出しまして、何人かがなぎ倒されました。兵隊さん達はよってたかって解剖の助手を勤めます。鼻は根元で切られ、額は鋸で開かれて脳味噌を出します。象牙は小さいもので二〇糎でしたが、一本は切り損じ割れ目ができました。大きな頭は額が割られ、不気味な大きい鼻穴がのぞき、四本の肢は太い丸太となって転がっており、内蔵はそれ〴〵だらしない恰好で並べられている情景は異様でした。

中支戦線で牛の解体を見慣れておりましたけれども、気の弱いものは正視できない作業が賑かに進展しました。食うための執念にとり憑かれていた勇士たちは不感性のようでした。

肢一本は村長らにやり、あと三本は各小隊と指揮班に分け、内臓ほかは適宜欲しい連中に分け

与え、象牙一本は記念として私が取りました。

牛馬に積んで意気揚々と引きあげまして、喰ったわけですが、味は？ときかれますと、食うには食いましたが味は一向に覚えておりません。象は草食動物ですから臭くなかったのはたしかです。鼻は、薄く切って石で叮いたものを何日煮てもナマゴムみたいでした。村長が教えてくれたところによりますと、一番上等の肉は、少量だが象牙内の肉と、足の爪形が残っているツマ先部分でした。中国料理で熊掌が美味として珍重されるのを思い出しておりましたが、うまかった記憶は残念ながらございません。脳味噌は食ってやろうと考えまして、兵隊さんが取り出したのを両腕に戴せてみますと、紫色の筋が縦横に走っております。獣医は保証しませんよと云い、誰か下士官が『主計さん、それ食うと気が変になりまっせ』とかひやかします。下心（シタゴコロ）が判らぬこともありません。誰かが腹一杯喰ったはずです。中支セツカン作戦では牛肉のにおいが鼻にツキまして、最後は牛の脳味噌を食っていた頃があったのです。豆腐に似ていまして私は好きでした。象牙に就きましては、幸い二〇糎ほどでしたから後生大事に持ち続けておりましたが、バンコック・ニュウライフ・キャンプから帰還乗船の前日、泣く泣くキャンプの棚奥に押し込み、神妙に合掌して別れを告げました。そのわけは、乗船前の戦勝国側チェックで、未加工品はすべて掠奪品と見做す、没収すると共に、所持者の属する部隊の乗船順番をあとまわしにする、と通告があったからです。

⑥ イラワジ河畔会戦、マンダレー脱出

イラワジ河畔会戦と申しますのは、インパール作戦失敗のあと、残されたビルマの南東部を何とかして保持しようと計画された会戦でございました。これは、日本軍に抵抗線の陣地構築の余裕を與えず、英印軍がドン〳〵南下しまして、その勢いに圧倒されて負けたいくさでした。当時私らが集結しておりましたマンダレーはほぼ敵の包囲の中に居り、三重包囲といわれました。私はいよいよ玉砕かと覚悟をきめまして、赤錆の軍刀を煉瓦のカケラで研ぎ、拳銃の手入をしたのを想い出します。その包囲を脱出せよとか死守せよとか、軍命令が何度か変更になりまして、最後は脱出となりました。軍司令部は既にはるか後方にあり、インパール作戦中の命令と同じく、どうも現状無視、実行不可能のものが多かったようです。しかし悪法でも法であるのと同様、悪い命令でも命令に違いありません。その処理に誰もが苦労したことでした。

包囲されていたのは、軍貨物廠関係部隊と祭、インパール生き残り、師団司令部関係、輜重、衛生、野砲の部隊などでした。歩兵は何処に居たのか知りません。脱出に際し、臨時編成の大隊ができて脱出援護の任に当ることになったのですが、非戦闘部隊の輜重隊から大隊長、中隊長一人が選ばれました。M中隊長は元私らの清水隊の小隊長でして、『歩兵操典』通りの突撃を敢行して立派な戦死を遂げましたけれども、どうも浮ばれないのが残念です。英軍は怒涛の勢(イキオイ)でした。

私は主計として収集隊勤務もありましたから、マンダレー周辺の道をある程度知っておりました。そのためか、清水隊に脱出路誘導の任務がきました。とてもうまくできそうにありませんが已むを得ません。清水隊長を先頭に、私が次に従いまして、この向うに敵の歩哨が居ます。アレに見つかると、間もなく迫（撃砲）が飛んできますなどと説明しながら、夜陰に乗じて、一応は師団長以下、各部隊を順次誘導しました。敵が感づかぬはずはありません。照明弾が次々と揚りまして昼を欺くばかり、周辺から『迫』が右に左にメチャ〳〵にきました。敵の姿は見えません。大部隊が右往左往して逃げまどう有様は、私もその一人ですが見られたものではありません。将校、下士官、兵、部隊の大小を問わず、全く支離滅裂、みんな思い思いに南へ南へと逃げるだけでした。我ながら敗走日本軍に呆れました。

イラワジ河にミンゲ川が合流する地点の南へ逃げるミンゲ橋が既に爆破されていたので、ミンゲ川北岸を上流に進むほか、途はありませんでした。夜が明けてからの一日は、各人それ〳〵息をひそめて身を隠していましたが、敵の偵察機（トンボ）は悠々と飛び廻り、迫撃砲と野砲の砲撃は間断なく続きました。私は万一の時の変装用にビルマ人用のエンジンとロンジン（上衣と腰巻）を手に入れました。

その日夕刻を期して、祭師団は集結命令が出ましたが、その集結地点は危険と感じまして少し離れて待機中に、その地点を含む部落全部が、野砲の集中砲火を浴びて、パゴタ、森も一緒に燃

えて飛び散り、師団長も負傷しました。私の横に伏せていた他部隊の中尉の首が『迫』で飛ばされたのはこの時でした。機関銃で狙われている間隙を縫ってマンダレー水道を横切ったのはその夜のこと、夜でも野砲が飛んできました。第二弾の着地と反対側に逃げ廻り、命拾いをしました。すべてが運でした。

東へ東へと逃げるのですが、すぐあとを敵の野砲が追っかけてきます。敵の機動部隊も攻撃をかけてきます。何日か上流へ遡りましたあと南へ逃げるには渡河せねばなりません。野砲の追撃もやみましたので、泥まみれの体の水浴を兼ねて、渡河点を探すために三名がミンゲ川に飛び込みました。川巾は百米弱、手前が急流でした。水面には出ていない中洲（ナカス）の場所を確かめ、背丈のたつ限り上流へ歩いてから再び対岸へ流れつく計算です。

中洲のあるあたりへ流され手を振って地点の合図を終り泳いでいる時、突然敵の偵察機が川筋に沿って現れました。見つかれば必ず銃撃されますが隠れようがありません。私は運を天に委せて、死んだふりをしてながされました。潜ろうとしたのですが、びっくりした時は息を吸っています。ポカーと浮きました。もう観念していました。Uターンして敵機が銃撃もせずに飛び去った時は、安堵の大きい息と共に水中でこおどりしました。ずいぶん下流まで流されてクタ〳〵になって帰りつき、戦友たちの犒いの言葉ににが笑いしかできませんでした。幸い他の二人は岸に近かったのか、私より先に無事帰っておりました。

一粁ほど上流にいた祭司令部は爆撃にやられたと伝わってくるし、敵は既に日本軍の渡河地点を察知しているかも知れない。猶予は許されず、筏作りを急ぎました。が、ビルマの竹は空洞が殆んど無いので沈みます。生樹(ナマキ)も水分が多いので水面ヒタ〳〵です。バナナの茎も同様でした。ほかに何も見つかりません。装具（武器と背負袋ぐらい）を乗せますと、水面下に沈みますがやむを得ません。それ〴〵四人ほどが組んであやしげな筏を急造しました。片手で筏の四隅を持ち上げながら、他の手で水を掻いて泳ぐわけです。闇夜に中洲のある方向へ遮二無二、次々と突込んだのです。つま先が川底についた時の嬉しさは譬えようもありませんでした。何人流されて死にましたか判りません。限られた負傷者らは、やっと見つかった現地人の舟で渡河しました。

⑦ タイ国へ脱出

ビルマ東部にサルウィン河がありまして、上流の中国名は怒江(ドコウ)といいました。祭の各部隊はミンゲ川を渡り、満身創痍、疲労困憊、シャン高原を南に辿りまして、やっとのことでケマピユーまで来ました。ここで師団はひとまず集結しまして、体制をたて直し更に南下、モールメンをめざすことになりました。この時の清水隊の放れ技(ハナワザ)をお話致します。

『主計さん、もうこのへんで歩かんでよい方法ないかなあ。工兵の舟艇なんとかで』とM軍曹が切りだしました。腹案があるのかと訊ねますと、手持の牛車と交換条件で、モールメンまで舟

を出させたらよいのでは、ということです。私はすぐにその案にのりました。清水隊長に諒解を得て、工兵隊の責任者と話をつけました。

祭兵団は師団司令部を先頭に各部隊の出発順序、行程予定までができまして、輜重隊は最後尾、そしてわが清水隊はそのまた最後尾です。各隊の単独行動は過去ずっとやったきましたことですから、目的地へ早く着くのは別に構わぬはずときめた次第でした。

たしか歩いて一週間の行程、百数十粁を、清水隊一行七十名ぐらいが出発を半日おくらせながら一気に河を下り、翌朝モールメン到着でした。一体どうしてこんなに早く?と不審がる野戦倉庫長に対して、『いやあ、それはねェ、輜重隊はいろんな足を持っとるよ』とか云いまして、祭兵団の将兵を迎えるために万端の準備をしておった食糧甘味品、被服類などを、ひとあしお先にたんまりと受領して、先ずは兵隊さん達に腹一杯食わしたということでございます。その時ビタミン補給に良いからと、緑茶の缶を三箇貰ったのを憶えています。

そのあと、泰緬鐵道のお世話になってタイのバンポンまで逃けのびました。バンポンはノンブランドックの近くで、東へバンコック、南へマレー半島に通ずる鐵道の分岐点でした。

⑧ タムアンでの給与担当（敗戦後）

このバンポン地区には、以前、連合軍の俘虜の収容所、タムアン・キャンプがありまして、二

十年八月十五日日本敗戦と同時に主客転倒し、英軍バーンズ砲兵少佐が司令官として乗り込んできまして、タムアンに位置しました。直ちに武装解除、集積糧秣は全部押さえられて所有権が移りました。それ以後私らの抑留生活が始まり、レーションに依る乏しい食糧でもって苦役に従事ということになりました。

ビルマ側のことは、三高同期会田雄次氏の有名な『アーロン収容所』に詳しく書かれておりますが、こちらタイ側では少々違ったところもあった様です。指定された収容所の名称があったとは記憶にありません。サレンダーと呼ばれて各部隊はバラ〳〵に居ましたが、祭兵団を中心に、鐵道第五連隊（泰緬鐵道建設）関係各部隊に、主として鐵道及び道路の復旧などの作業が課せられました。祭参謀部は全人員の掌握と毎日の作業振当に苦労しました。しかし、苛酷な仕打ちはどこにも無かったと聞いております。階級章は従前通りつけたまゝでした。

武装解除といゝましても、各部隊には警備と治安維持のためだったのでしょう、小銃を何挺かづゝ残してくれました。そしてタムアン・キャンプ自体の警備のため、日本の兵隊さんが小銃を持って歩哨に立っていました。

私は、タムアン・キャプテンを除くタムアン周辺の給与担当を命ぜられました。約四千人の給与です。私はタムアンの鐵道隊本部に位置しまして、押さえられた糧秣から、レーション計算による主食類を英軍側から払出しを受けて各部隊に交付することと、別購入の副食を分配すること

が主任務でした。

四千人の中には鐵道建設に参加した民間人、オランダ人、マレー、ジャワ人、それに中国人、インド人まで含まれておりました。

日本人は何と云っても米です。労役に服する兵隊さんにレーションの一日、三百～四百グラムではとても足りません。増量や良質米の払出し交渉に苦労しましたがラチがあきません。各部隊の佐官級が主計中尉に辞を低うして頼まれるのには閉口致しました。

レーション掛ける日本軍人員の数量は参謀部で作る日報の関係がありますので、誤魔化しはできませんが、鐵道民間人に対しては人員掌握は曖昧らしく、現物給与のあと、その受領証記載の同数量の払出を受けることを利用してやらうと考えまして、文書偽造の決心を致しました。経験の無いことですし、悪いことですし、ずいぶん神経を使いました。

現物支給に私が一緒に行きます。先方の責任者に受領サインをして貰う時、必ず英文字でしてくれと頼み、インク、ペンの持ちかた、書くスピードなどをよく視ておきます。ｅとｌの大きさ曲がり具合、ｙとｇの下の部分にはそれぞれ特徴があるものです。二、三枚の本人のサインを前にして、一つのサイン百回くらいしますと、絶対大丈夫の自信がつきました。関係者に箝口令をしき、別室で一所懸命練習を続けました。元々日本軍のものだったから取戻すだけのことと、割切ってやりとげましたけれども、鐵道隊の下士官、兵長くらいが民間人を殴った、いじめたと、

指差すだけで昭南島送り（重労働）になる現場を、タムアン・キャンプ内でしば〳〵見ておりますので、内心は気が気でなかったことを白状致します。相当たくさんの偽造文書を間をおいて作り米の量などを適当に書き込み、その分を各部隊に増し給与したことでした。

どうも、予定時間が相当超過しましたようで残念です。最後にお話し申し上げたかったのは、この朝日の座談会㊤と㊦でありますが、本日のむすびとしてご覧下さい。これで私の話を終らせて頂きます。ご清聴ありがとうございました。

三　『戦争を忘れまい』座談会㊤㊦抜萃

（昭和62年8月28・29日、朝日新聞）

連載『戦争を忘れまい』の投稿が続いたあと、次の出席者が、①なぜいま戦争を語るのか、②戦争体験の伝承、といったことを中心に催された座談会の記録である。

出席者、入江徳郎（評論家）、高木俊郎（作家）、秦　郁彦（拓殖大教授）、司会永沢道雄（編集委員）

各人それぞれの発言があった記録の中から抜萃すると、

【上】

（入江）……軍部が強大になりすぎたこと…日本の教育が下地をつくったのを見落してはなぬと思う。……小、中学の歴史はもっぱら戦争と天皇だった。

（高木）部隊史など……『部隊の不名誉になることは絶対に書くな』という。

（秦）第一線での軍の恥部を見ている中隊長クラスが語らない。

（入江）『軍人にあらずんば人にあらず』、批判するものがあれば『たたき切るぞ』とくる。

（秦）……日本軍という存在はがん細胞のようなものでした。……

（入江）……二、二六事件のあと、陸軍大臣に擬せられた寺内寿一が、閣僚に政党人や自由主義者を入れようとしているのは何事かと文句をつけ……間もなく陸軍大臣の現役武官制をもち出し……

（永沢）どこの軍隊でも自己増殖の傾向は持っているんですが、日本の場合は抑制機能が働かなかった……。

（入江）……富国強兵の富国がどこかへ行ってしまった。……

（永沢）明治天皇は軍人は政治に関与すべからずと言われているのに……

（入江）陸軍大臣武官制で歯車がはずれてしまった。

（高木）……内務班では正常な人間にはできないような加虐行為が行われていた。天皇と國の

ために死ねる軍人精神を鍛えてやる…。

（秦）勝つためには合理的な訓練と戦い方をせねばならないのですが、……補給が切れ餓死させてしまう。……戦史上も稀有の例でしょう。軍人の戦死数は約二百万人……敵弾に当って死んだ人は三割いるかいないか……。

〔下〕

（高木）……最初から現地自活といって安易に考えていた。……補給担当参謀は末席で発言力が弱かった。アメリカは最も頭の良い人を補給担当参謀にする。

（高木）参謀の考え方が現実と遊離していた。……ビルマのカチン族にしても小さな部落で焼畑農業……部落の人が一年か二年養えればよいという規模……そこへ部隊が次々入り込んできてわずかな食糧の奪いあいになる。同じようなことが東南アジア各地で起った。

（秦）参謀はスタッフですから戦犯にならず……実に奇妙な構造……。

（高木）日本の若い人が無関心ということは大きな社会問題……。泰緬鐵道全通計画をタイ政府にもち込んだところ、現地新聞は『死の鐵道』と書いて反対した。

（高木）今日まだ明らかにしなければならないことがあります。その一つは蘆溝橋事件です。……事件の真相はわからないまゝです。……。―河野又四郎氏（牟田口連隊長の副官）自筆原稿『蘆溝橋事件手記』を昭和56年11月入手――

私は改めて河野さんの手紙や電話メモをもくり返し読みました。……昭和一二年七月七日の年田口連隊長と昭和一九年三月の牟田口軍司令官の行動に同じものがあるということです。作戦行動でいちばんの問題は指揮官にあり、インパールの敗因は、その一部は蘆溝橋事件にその萌芽があるといっています。

……。インパール作戦開始の時、牟田口中将はいいました。『蘆溝橋で第一発を撃って戦争を起こしたのはわしだから、いまわしがこの戦争のかたをつけねばならんと思っておる』この歴史的発言は重大な意味があったのではないか。……牟田口中将はインパール作戦の暴挙の将というだけではなく、その歴史的に重要な役割を認識しなければならないでしょう。牟田口の場合は、つまり機会がなくても機会をこしらえて出ていこうとする。河野さんが『指揮官の考え方が重要』といったのはこのことです。

（秦）興味深い証言ですね

（高木）蘆溝橋事件の真相は発砲前にあったということです。

（神鋼電機社友）